

## 1. 檜崎重視氏学生日誌について

檜崎重視氏学生日誌は、檜崎重視氏から佐賀大学美術館に一括寄贈された日記・手記の資料群である。檜崎氏の在学中 1943 年から 1947 年までの四年間、約 1900 日間の天候、起床時間、学校行事のほか、学生生活、友人や教員との交流、個人の心情等が記載されている。

## 2. 檜崎重視氏について

檜崎氏は 1927 年 12 月佐賀県唐津市浜玉に生まれの画家。1947 年（昭和 22 年）佐賀大学教育学部の前身となる佐賀師範学校本科（美術科）を卒業後に上京。洋画家・森田茂に師事し、教鞭を執る傍ら絵画制作を続ける。1952 年（昭和 27）に東京教育大学を修了後、1955 年（昭和 30 年）文化学院芸術科を卒業。1979 年（昭和 54 年）改組第 11 回日展、ならびに 1981 年（昭和 56 年）改組第 13 回日展において特選を受賞、2001 年（平成 13 年）第 67 回東光展にて文部科学大臣奨励賞を受賞。現在も公益財団法人日展会員ならびに東光会名誉会員・常任審査員として活動を続けている。現在は西東京市にアトリエを構え、西東京市美術協会や、地域の小学校での美術指導、圏域 5 市美術展の運営などにも関わるなど、画家・美術教員双方の立場で地域の文化振興に寄与している。

## 3. 官立佐賀師範学校

### 1) 沿革

官立佐賀師範学校は 1943 年（昭和 19）設立の官立（国立）師範学校である。

1884 年（明治 17）創立の佐賀県師範学校を起源とし、1928 年（昭和 3 年）に佐賀県女子師範学校が分離独立、その後 1943 年（昭和 18 年）に再び統合する形で官立佐賀師範学校となった。旧佐賀県師範学校校舎（佐賀市赤松町 53 番地、現・佐賀県立美術館・佐賀県立博物館）に男子部、旧佐賀県女子師範学校校舎（佐賀市赤松町 19 番地、現・佐賀大学文化教育学部附属中学校）に女子部が設置される。本科（3 年制・中等学校卒対象）と予科（高等小学校卒対象）が設置され、県内における教員養成を担っていた。第二次世界大戦後の 1949 年（昭和 24）学制改革における新制佐賀大学発足において、佐賀青年師範学校と共に教育学部の母体として包括されたのち、1951 年（昭和 26 年）3 月を持って廃止となる。

### 2) 佐賀師範学校の美術教員

- **山口亮一** 県立師範学校時代からの美術教員。山口は佐賀県美術協会の設立メンバーでもあり、武藤辰平や北島兵一、田中宗一、山口孝行らとともに佐賀県における油彩画教育の中心的人物としても活躍していた。山口は「教育」と「創作」の双方を重視する美術教育を実践しており、これは後の佐賀師範学校や佐賀県美術協会の規範として地域に根ざすこととなった。第二次世界大戦中は学生に対して戦争画の指導を行っていた形跡があり、佐賀大学美術館収蔵の《慰問絵巻》に当時の指導の一端を見ることができる。（図 1）
- **石本秀雄** 1943 年（昭和 18）の 11 月末に山口の後任として着任。前年の 1942 年（昭和 17）佐賀県依嘱図画研究発表会ではサンダルをテーマに機能と美を取り上げ、 Bauhaus の理論を新しく教育に用いるなど当時の先端の美術を教育現場に積極的に持ち込んでいた。石本もまた山口と同じく、作家と教員双方を高いレベルで両立する教育を行っており、その精神は後の佐賀大学特設美術科に引き継がれていく。
- **中元一男** 1939 年（昭和 14）から 1943 年（昭和 18）8 月 9 日まで工作を担当していた。
- **城秀雄** 1943 年（昭和 18）8 月 9 日より佐賀師範学校に着任、中元と交代する形で工作を担当。現在は染織工芸の専門家として知られるが、当初は木工を主たる専攻分野としていた。
- **久富邦夫** 1945 年（昭和 20）に応召された後、故郷の佐賀に戻る。翌年の 1945 年（昭和 21）に開催された「郷土作家油絵展」を契機に石本の推薦により佐賀師範学校へ赴任する。その後、佐賀大学特設美術科の設立以降まで、石本と共に佐賀における油彩画教育の礎を築いていくこととなる。

## 4. 研究の方法

1. 資料の状態調査・保存
2. 1943 年から 1947 年までの四年間、約 1900 日間全日程の翻刻の実施
3. 師範学校における授業（時間割）、ならびに美術教育に関する記述を抽出

4. 師範学校外の私生活における美術に関する記述を抽出
5. 大学史との照合
6. 榑崎氏のオーラルヒストリー聴き取り調査の実施
7. 翻刻内容のデータベース化

1. 各資料の本紙の状態は比較的良好であるが、ノートを構成する紙は酸性紙であるためヤケが生じている。また、1945年以降に使用されている市販ノートの紙質は戦時下の物資難の影響により良好とはいえ、酸化が進みしなやかさを失っていた。また、榑崎氏日誌S20(1945)1月～8月は経年劣化による丁外れを補修するためにセロファンテープが添付されていた。セロファンテープに使用される化学糊は紙資料の酸化劣化を促進させるため除去が必要であるが、現時点では現状維持にとどめ、将来的な除去を検討した。榑崎氏日誌S21(1946)1月～8月は水損による固着が見られ、竹箆とピンセットを用い慎重に丁を外していった。各資料はドライクリーニングを施したのち、酸化劣化を緩和するために中性紙エンベロープに封入した上で、酸化防止剤とともに中性紙箱に納入した。保存は佐賀大学美術館収蔵庫で行い、通年室温20℃、湿度55%RHを保つ。

2. 翻刻については、将来的に佐賀県ならびに佐賀大学における教育史資料に資するため全文翻刻をおこなった。日誌に記載されている情報量が膨大であり、本研究においてその大半の時間を割くこととなった。2023年(令和5)5月から開始した全文翻刻は2024年(令和6)1月に完了し、内容の整理・分析とともに7の翻刻内容のデータベース化を進めている状況である。このデータベース化については、令和5年公益財団法人鍋島報効会研究助成終了後も継続して行なっていく。

## 5. 各日誌の内容について

### 1) 標語の比較

### 2) 各年度の比較

#### (1) 1943年

同年11月末、美術教員は山口亮一から石本秀雄に交代する。5月31日に記されている「佐賀県美術展」は、第二次世界大戦により中断される直前の第26回佐賀県美術協会展のことであると思われる。5月30日から6月2日にかけて旧公会堂(現・公益財団法人鍋島方向会徴古館)で開催されており、資料難のためポスターは反故紙が使用されている。また、この時期は図工の授業でどのようなモチーフの作品制作を行なったかについての記述はあまりなされていない。しかしながら、言及自体も少ないものの静物デッサンや風景画など基礎的な指導を受けている様子が窺える。また、上記の通り授業の一環として佐賀県美術展の見学に行くなど、美術の現場に実際に足を運ぶことが行われていたことも特徴の一つであると考えられる。(図2)

#### (2) 1944年

この年から榑崎氏は油彩画の制作を行うようになる。当時、戦争画の制作のため美術教員や美術学生には絵の具が配給されていたが、榑崎氏は給与で絵の具を購入している。作品制作は授業中ではなく帰省などの課外時間に行われている。初めてキャンバスに油絵筆を乗せていく経験を得た際の描写が瑞々しい。この年より勤労奉仕に割かれる時間が大幅に増加し、それに伴い日誌の中でも授業に関する記述が極端に減少していく。また、教員や学生の応召が始まり、それに対する不安な内面が生々しく記述されている。年度の後半になると、学徒動員のため学生たちは長崎市の三菱兵器製作所に動員される。それにより学校における授業の記述は完全に見られなくなる。教員であった石本も戦時下の圧迫感により制作の自由を求めることができず、学徒動員勤務中に応召され佐世保海兵団に入団する。石本は9月15日、充員召集を命ぜられ相浦海兵団に入団、海軍2等水兵を命ぜられる。後年の記録によると、石本は海軍ではポスター係として記録的なものを書かされていたと回顧しており、当時の同僚には美術家の納富進や中村鉄がいたという。

#### (3) 1945年(1月～8月)

教員の石本は1月1日、海軍一頭水兵を命ぜられる。学生も次々と特攻隊に招集される中、榑崎氏も翌年度以降に特攻隊に応召されることが決定しており、日誌にはそれに対する決意が綴られている。しかし8月、広島と長崎に原爆が投下され終戦を迎える。榑崎氏は8月7日に長崎市を離れていたため原爆の被害から逃れることができた。日誌には新型爆弾(原爆)が投下されたという噂に対する所感が綴られている。その数日後、8月15日の日誌には乱れた字で「夢」と記されており、戦時下教育を受けた学生としての落胆が窺える。9月1日、石本は召集解除され小城町に帰郷、同月、佐賀師範学校に復職する。しばらく授業は再開されず、日誌においては敗戦処理の混乱や、戦中から戦後にかけて急激に変化する教育の方針に不安を覚える学生達の様子が記述されている。(図3)

#### (4) 1945年(昭和21)8月以降～1947年(昭和22)3月

新しい教育の実施にともない佐賀師範学校における学生自治が活発化する。1946年から授業が本格的に再開するのに伴い、日誌の内容は授業や美術制作に関する比重が増加していく。また、スケッチが添えられるようになっていく。(図4、5)

さらに特筆すべきは、学校運営やカリキュラムについて学生が大学側と交渉し、学校運営そのものに大きな関わりを持っていることである。専攻科の設置に際しても自治会を中心とした学生が主体となって進めている様子が伺える。

## 6. 専攻科の設立と学芸大学昇格運動(新制佐賀大学設置運動)

1947年(昭和22)5月31日、文部科学省主催の全国師範学校校長協議会において新制大学設置に関する協議が実施された。これについて、協議会に出席した山本栄喜佐師校長は6月6日付の佐賀新聞の紙面上で「佐賀に学芸大学を設立する案も考えられるが、九州に一・二の学芸大学が設けられる見込みであるから、佐賀に学芸大学を設立する案を考えたい」と述べている。

これに対し、佐賀高等学校、佐賀師範学校、佐賀青年師範学校は大学設置に向け運動の組織体制を結成していく。まず、佐賀高等学校は6月下旬、同窓会、父兄会、有志による後援会を結成し、県に「佐賀大学設置委員会」を設けた。一方、佐賀師範学校、佐賀青年師範学校側は7月上旬「佐賀学芸大学期成会第一回大会」を開催し、学校当局、在校生、同窓生が結束して昇格運動に進捗することを決定した。これに伴い佐賀師範学校生は7月中旬より、大学昇格運動資金獲得運動を開始した。山本栄喜佐師校長の働きかけもあり、7月28日に開催された臨時県会で満場一致で決議されたのち、「佐賀学芸大学期成会」(名誉会長沖森県知事、会長田中虎登県議)が結成された。8月、佐賀師範学校に「昇格運動生徒本部」が設置され、同年の年末には準備委員会が開かれている。

この時点では昇格後の大学名称が未定であったが、翌年1948年(昭和23)には「佐賀教育大学期待成会」が設置されており、学芸大学から教育大学へと名称変更がなされている。対して佐賀高等学校側は1947年(昭和22)6月8日に「九大分校設立結成会」を結成し、九州大学佐賀分校としての発足を目指している。つまり、九州大学佐賀分校においては文科一年、理科一・二年の教育を行い、佐賀師範学校昇格の教育大学では小学校から高校までの教員養成を行うという構想となっていた。この中で双方の意見が対立し、翌1948年(昭和23)には5回にわたって佐賀師範学校・佐賀青年師範学校と佐賀高等学校の間で「公聴会」が開催されている。5月18日に開催された第一回公聴会には、佐賀師範学校・佐賀青年師範学校側の意見発表者として石本秀雄が参加している。これらの紆余曲折を経て佐賀師範学校・佐賀青年師範学校と佐賀高等学校の3校併合による佐賀大学設置の流れとなった。

日誌の記述を参照すると、佐賀学芸大学昇格運動に先立ち1946年(昭和21)6月の時点で生徒自治会による専攻科設置に対する活動が行われている。運動に際しては自治会=校友会が中心となり、榎崎氏はその役員であったことが伺える。また、「ほのほ会」という学生有志による組織が結成されており定期的に討論会が開催されている。専攻科の設置運動に際しては「教育刷新運動」の文言が頻出し、専攻科設置=教育刷新運動として学生が活動していたと推測される。当初、榎崎氏ら生徒側は専攻科の設置に際し具体的な体制案を学校当局へ提出するなどするものの交渉は難航し、石本秀雄に協力を仰ぐほか、ストライキを行なっている。翌年1947年(昭和22)の時点では専攻科設置に関する運動は佐賀学芸大学昇格運動と連動している様子が見られ、自治会に所属する学生が昇格運動生徒本部と兼任していたと考えられる内容となっている。これらの運動の背景について、佐賀県美術協会に所属する美術家の影響や、佐賀高等学校の関係者、並びに共産党との関連が示唆される記述が見受けられる。榎崎氏は佐賀高等学校の教員に紹介される形で佐賀県共産党青年部の事務所を訪問している。しかし、その後の記述ではGHQによる監視のため共産党との関わりが専攻科設置や新制大学設置に影響がある旨が記されており、校友会の中でも激しく意見が対立している様子が窺える。

専攻科運動の設置そのものは学生が主体となっているが、石本ら教官がそのバックアップを行っていることは当時の記録やヒアリングにおいてほぼ確実であること言えよう。難航していた専攻科設置運動は、佐賀学芸大学昇格運動の本格化に伴い急展開を迎え、1947年(昭和21)に可決する。日誌の記述によれば、この専攻科は佐賀大学設立の布石として大学当局側が必要としたことが見受けられる。(図6、7)特筆すべきは榎崎ら学生自身の手でカリキュラム案が作成されている点である。美術科以外の学科のカリキュラムについての記載は少ないものの、美術科の設立の前後でデッサンなどの実技が教科書に則ったものだけでなく、理論や美術史が重視された本格的な美術家教育としての内容が拡充している。1947年8月の日誌には授業と連動し、学生が主体となって美術展を開催している。会場は玉屋デパートのフロアを借り、開催に際して進駐軍からの許可の交渉や会場設営、広報などすべて学生自らの手で行っている。このように、校内だけではなく積極的に外部に発信する姿勢はあきらかに美術家と表現者の兼務と双方の能力の育成が意識されており、その後に設立された佐賀大学特設美術科の性質に通底しているといえるであろう。

この専攻科設置については、石本秀雄ら教員側も佐賀大学設立を見越して受容していったことが推測される。専攻科の設置運動の機運は戦後の民主主義教育や新しい教育の中で醸成され、榎崎氏をはじめとする学生の自治によるところが大きいことは間違いのないであろう。

う。また、この専攻科は新学制度における専門範囲や門学科の性質を意識したものであると同時に、美術教育だけではなく美術作家としての制作・発表の機会が設けられている。専攻科設立の2年後の1949年（昭和24）、新制佐賀大学の発足に伴って佐賀師範学校は佐賀青年師範学校、佐賀女子師範学校とともに再編され教育学部となる。佐賀師範学校からは石本秀雄、城秀雄、久富邦男がそれぞれ引き続き教鞭をとっている。

## 7. 檜崎重視氏のオーラルヒストリー

佐賀師範学校の卒業生は高齢化が進んでおり、当時の証言を語る事ができる者は年々減少している。本研究において檜崎重視氏学生日誌と共に檜崎氏本人のオーラルヒストリーを残すことは、佐賀大学における美術教育史の今後の研究に資するための資料を残すために必要であると考え、聞き取り調査を実施した。



図1 山口亮一「慰問絵巻」1942年（佐賀大学美術館蔵）



図2 檜崎氏学生日誌 1943年（佐賀大学美術館蔵）5月31日の日記。山口亮一の引率で公会堂（現・徳古館）にて開催されていた佐賀県美術展を見学しに行く記述。

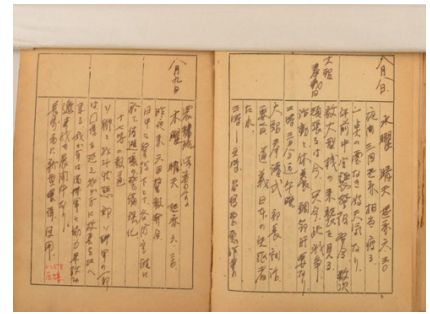


図3 檜崎氏日誌 S20 (1945) 1月～8月（佐賀大学美術館蔵）8月9日の日記。佐賀師範学校の学生のうち、檜崎氏が所属していた班は直前に長崎を離れていたため難を逃れた。



図4 檜崎氏日誌 S21 (1946) 1月～8月 1946年後半より日誌の記述が横書きになり、美術教育の内容そのものへの言及が増加する。

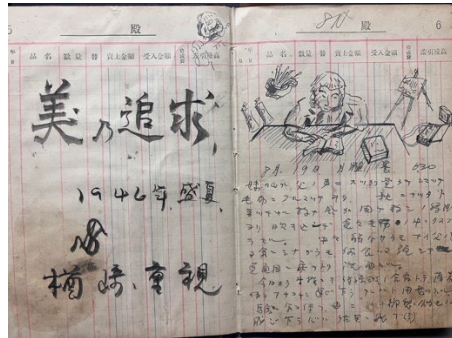


図5 檜崎氏日誌 S21 (1946) 9月～12月

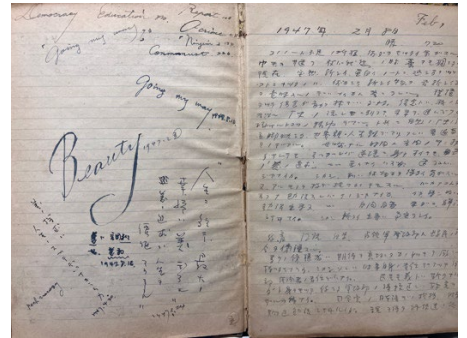


図6 檜崎氏日誌 S22 (1947) 2月～8月 1947年2月24日、美術科設立決定を記念し、専攻科設立運動に携わった学生たちの寄せ書きが記されている。

1947年  
 2月24日 月 曇 7.00  
 ボカボカだ。  
 教育刷新委員決定。即 二十四日より美の運びとなった教育大学にてその授案と 明年四月 本二二年の四月よりその過渡期として 教する 教案をつくることなる委員であり 急を要する事なので二時限目より総人会合評議員集  
 合の後 直に決定したが、結局男子部に於ては現総ム又本一三名を加ふ九名決定。我々は大なる発展のため自己を犠牲に供しなければならぬ。しかしこれ程愉快な事はないが 身を以て思ふ不安も頭をもたてける。  
 考査時間割発表 自分は自分より外に自分を知らぬものはないと思ふ。

25日 火 晴曇 7.20  
 華岡新部長3年 訓話  
 美化運動に於いて 学制改革について  
 話に時間々 活れば先生は意外情熱的だ  
 先生の信念の であつた。  
 話の中に我々生徒に納得出来ぬ点ありたる故、早速総ム六名は午後5時より先生宅を訪問 その不 聞き併せて今後の学生運動学校運動について 不 目をさせる。不審と云ふのは学校改革に生徒の案は 云ふ意見 聞いてみると 裏には 政治運動に持ち上つてゐるこの学制改革 特に師範の昇 問題 政治的な裏があるのだ。  
 しかしこれは新教育のためは非共必要事である。八時、話せばわかる 人はないと 説明に 引揚げる。話せばわかる男らしい先生だ。  
 依然慶員台意し このまじや試験も危ぶまれる

27日 木 晴 7.10  
 物、自、午後授業打ち切り  
 我等の切 学年主任 石本先生の御骨折により諸先生の同情 我等総ム六名は試験延期の特典に与る。即、教育大学創設 理想案発論案(明年の暫定措置)の生徒委員なればなり。  
 女子部 仕委員と協議を進める。本一本二迄大体完了 本三で行詰る。男女共学を前提とした選修の強化 この着眼点に立脚して審議するのであるが中々決議しない。又 要する問題である。而して時間が限られてゐるのだ。学校の授 ずる事は我等のこの務を ならしむのみにある。

図7 檜崎氏日誌 S22 (1947) 2月～8月 1947年 美術科設立決定直後の日記から翻刻・抜粋